様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２５１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２１８７

研究課題名（和文）近代バレエ成立過程の美学的・文化史的研究

研究課題名（英文）Studies on Aesthetic and Cultural Background of the Early Ballet

研究代表者
市瀬　陽子（ICHISE, Yoko）

聖徳大学・音楽学部・准教授

研究者番号：９０３１６８５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：　舞踊学の分野において、わが国では特に、初期バレエ史について学術的な研究が立ち遅れている。分野の発展に寄与すべく、本研究は近代バレエの成立過程に焦点を当て、研究を行った。
　まず一次史料に依拠した研究基盤を堅固に整え、さらに初期バレエ成立の背景、およびその美学を理解するために、文化的・社会的なアプローチを行った。
　本研究の最大の成果は、バレエの原点となるフランスの舞踊様式〈la belle danse〉について、史料研究に基づいた信頼に足る学術的な実演を導き、その骨子を映像化したことである。

研究成果の概要（英文）：　In the field of dance studies, Japan lags behind in academic research, particularly in the early history of ballet. Our study focuses on the formative elements of ballet, with a view to stimulate further development in dance studies in general.
　By establishing the basis of our research from original sources, we viewed cultural and social approaches to better understand the background and aesthetics of early ballet. Additionally, we investigated historical treatises and other documented evidence to prove that the French noble style, or “ la belle dance ”, was an authentic starting point of ballet.
　Basic movements captured in moving pictures constitute the core result of this work.

研究分野：舞踊史

キーワード：舞踊史　表象　バレエ　バロック・ダンス　文化史　身体表現

１．研究開始当初の背景

本研究は、先年の研究課題「バレエ文化史研究の基盤整備」（2012～2015 年度、課題番号 24320044）の成果をふまえ、西欧近代バレエの成立期にあたる 17 世紀から 19 世紀初頭の西欧舞踊史に焦点を当てたものである。

先の研究はわが国のバレエ研究に学術的な基盤を与え、その後の発展を促す契機となった。とはいえ歴史の分野については未だ整備の余地があり、中でも初期バレエの歴史は、伝聞、伝説、アナロジーの類に影響されやすい面があることから、それを脱するためにも、さらに堅固な研究基盤を確立することが必要となっている。

まず歴史研究の基本として、一次史料を根拠とする地道な研究が尊重され、徹底されなければならない。それを前提として、舞踊の作品や表現を扱うのは勿論のこと、背景となる社会や文化を視野に入れることも不可欠である。西欧近代社会におけるバレエの成立を追う上では、政治、経済、科学や思想、同時代の文学、音楽、美術など多くの分野に関心を向けた取り組みが促されるべきである。

いわゆる「バレエ」は、19 世紀前半に現れるポアント（トウ・シューズ）の使用が大きな特徴とされる。そのため、特にわが国においては、「ポアント以前」のバレエについて前史的に扱い、等閑に付す傾向にあった。日本の新国立劇場バレエ団芸術監督を務めたデヴィッド・ビントレー氏（在任 2010-2014）が自らリサーチを重ねて制作した《王は踊る The King Dances》（2015）や、パリ・オペラ座のバレエ学校創立 300 年記念ガラ（2013）など、創成期のバレエに着想した近年の作品も、日本では十分に理解されているとは言いがたい。その背景には、「バレエ大国」と呼ばれる一方で、指導や創作の現場において必ずしも正しい歴史知識が共有されていないという現実が横たわる。歴史研究の遅れは、舞踊芸術の現場にも影響を及ぼしているのである。

歴史の研究は、直ちに実演（ダンスの技術や表現、創作など）に寄与するとは限らない。堅実な研究は、まずそれ自体として尊重されるべきである。成果を積み重ねることにより、今後、結果として、その成果がバレエの教育に活かされ、あるいは新しい表現や創造を刺激することに繋がっていくことだろう。史料の研究を充実させることによって研究が活気づき、しかるべき形で表現分野との関わりを見いだし、望ましい連携を生じることが期待される。

２．研究の目的

前段の状況に鑑み、本研究は 17 世紀から 19 世紀初頭のバレエ、つまり「ポアント以前」のバレエについて、一次史料の研究に基づいて積極的な意味と価値とを与えようとするものである。

現在の舞踊芸術と比較して技術的に「未熟」であり、内容的に「素朴」で、時に理解し難く、進化の一過程にあるものと見なされがちな初期のバレエに対して、時代の精神や価値観、美意識に照らして本来の意味と価値とを見出し、変遷の過程を追っていく。

さらに研究の一環として、バレエの原点となるフランスの舞踊様式について、史料の検討に基づいた実演（再現）を目指す。この作業により、文献研究と実演との間をつなぐ可能性も示されるはずである。

以上の成果を学会等において公表し、また、舞踊芸術に関わる専門家と共有すべく発信する。そして、さらに広く一般に供する形で研究の成果を活用することも、本研究の目的に含まれる。

３．研究の方法

本研究は 3 年間の研究期間に、次の方法により目的の達成に向けて作業を進めた。

(1) 舞踊に関わる一次史料の整理と研究
(2) 周辺の関連分野についての資料研究
(3) 一次史料の研究成果をふまえ、学術的な立場から著作や関連資料の分析を行い、舞踊実演（再現）の可能性を検討する。
(4) 欧米の学会・研究会への参加により、最新の研究成果を得て研究を進める。
(5) 研究成果を学会等において発信し、また振付作品の発表、講座等を通して成果を公表する。

４．研究成果

舞踊史の分野において一次史料に依拠した研究基盤を確立するため、基本文献のデータを集め、特に重要な文献について詳細に検討した。一連の研究成果のうち本研究を特徴づけるものとして、以下（1）に詳述する資料映像の作成が挙げられる。インターネット上に様々なレヴェルの映像が数多く公開されている現在、正しい情報を発信することは、研究者の責任でもある。このたびの学術的な史料研究および海外研究者との積極的な交流により、最新の成果を反映した類例のないコンテンツを作成することができた。それについては今後、DVD 等のメディアとして、また Web 上において発信すべく、作業を継続しているところである。

研究成果の概要については、以下三つの観点から報告したい。

(1)17 世紀から 18 世紀までの舞踊に関する一次史料としては、舞踊を直接に扱う数々の理論書と並んで、振付および上演に関わる記録、宮廷行事等の公式記録、上演に関連する図像、

楽譜や台本などが挙げられるほか、私的な回想録や書簡なども貴重な証言として含まれる。

当時、バレエ／ダンスは宮廷貴族に必須の嗜みとされ、日常の所作や作法とも不可分の身体技芸として認識されていた。舞踊(身体)は社会性を表象するものと見做すことができ、その意味において現代とは全く異なる意識の下に行われていたといえる。宮廷にあっては身分に相応しい所作が求められ、自然な、調和のとれた姿こそが理想であり、現代的な表現において貴族を演じる際に屡々行われるような「気取り」や「誇示」は、避けるべきとされた事柄である。こうした例からも伺えるように、旧体制下の文化は後の時代において時に貶められ、あるいは幻想を纏って、我々が現在持つイメージに少なからぬ影響を及ぼしているのである。

舞踊が現実にいかなる方法で実施されていたのか、それを物語る手堅い資料に恵まれていることは、この時代の大きな特色である。それは絶対主義下の文化芸術のあり方を強く反映していると同時に、舞踊が文化的な支柱を成すものとして認識されていたことを示す証左といえる。16 世紀末から 17 世紀初頭、イタリアのダンス様式については非常に洗練された著作が複数残され、「バレエ」の語源となったバッロ／バレットと呼ばれる振付作品を、音楽と共に実演することが可能である。17 世紀から 18 世紀にかけては、スペインやイギリス、フランス、ドイツ、イタリアなど西欧諸国に、それぞれの社会と文化を反映した多くの記録が現れる。特に 17 世紀後半、国王ルイ 14 世の下、フランスで確立された舞踊様式は、バレエの基礎を確立し、技法を定義したものとして重要である。振付作品は独特の書法を用いて厳密に記譜され今日に残されており、音楽とステップの具体的な関係など、細かな内容まで汲み取ることができる。

これらの舞踊理論書を丹念に追い、周辺の史料と照合して総合的に判断し、文献の記述内容から所作・動作を再建し具現化する試みもまた、学術研究の一角を成すものとして意義がある。本研究においては、近代バレエの成立過程において特に重要であると考え、17 世紀末から 18 世紀前半フランスのダンス様式(la belle danse)を取り上げて、その骨子を動画として記録することに挑んだ。

基礎的な史料としては主に、ピエール・ラモによる二つの著作（*Le Maître à Dancer*, 1725 および *Abbregé de la Noouvelle Methode*, 1725）が根拠となる。フランスの研究者／舞踊家を中心とする作業グループにおいて意見交換を重ね、一定の解釈に達した内容について、最も基本的な動作に絞って動画を作成した。コンテンツは公開を意図して作成し、Web サイト、あるいは DVD 等のメディアや出版物の形で公開することを検討している。

さらに実演分野に関わる研究として、振付作品の復活上演という形においても成果を発表した。これらの試みにより、「文献研究と舞踊の実演」あるいは「学術的な歴史研究と現代的な創作行為」との間を繋ぐ道筋をつける可能性も見出された。

(2)18 世紀の舞踊史に関連する基礎的なデータの整理を行うとともに、この時代における最も重要な舞踊理論であるジャン＝ジョルジュ・ノヴェールの著作を手がかりにしながら、18 世紀後半において「ダンサーの身体」がいかに捉えられ論じられたのかについて考察を進めた。その成果は所属大学の刊行物において論文の形で発表し、学会やシンポジウムにおいて口頭発表を行った。

① 基礎的データの整理
—「オペラ＝バレエ」をめぐって

18 世紀、特に世紀前半フランスの舞台芸術の世界で、大きな流行を生み出したのが「オペラ＝バレエ」というジャンルである。ジャンルの名称からも分かるように、オペラ＝バレエにおいては舞踊が作品の主要な構成要素の一つとなっており、その意味で、オペラ＝バレエについての十全な理解なしにこの時代の舞踊史を論じることは難しいともいえる。

しかしながら「オペラ＝バレエ」に関する研究は、まだ極めて手薄な状況であると言わざるを得ない。例えば、今日の「オペラ＝バレエ」の定義からは外れるものの、18 世紀当時「オペラ＝バレエ」として認識されていた作品が多数あるという事態も、この状況を端的に示すものとして挙げられる。

殊に舞踊史研究の立場からオペラ＝バレエにアプローチする際には、18 世紀当時オペラ＝バレエとみなされていた作品をすべて考察の対象とすることが必要だと考えられる。なぜならば、それらの作品いずれにも「バレエ」の要素が含まれているのであり、つまりそれらは、当時の舞台芸術作品における「舞踊」の在り方を示す貴重な史料であるとも捉えられるからである。

こういった問題意識から、オペラ＝バレエを舞踊史学の視座から研究するための基礎作業として、17 世紀末から 18 世紀にかけてフランスで初演されたオペラ＝バレエの一覧を作成する作業を進めた。その際、この時代にフランスで上演された舞台作品を列挙しているカタログ的著作『バレエ、オペラ、その他の歌を伴う作品』(1760)を主な情報源としつつ、「オペラ＝バレエ」として記載されている作品のデータ抽出を行った。結果として、今回の作業においては 78 作品を抽出するに至った。

② ダンサーの身体への視線
—ノヴェールを中心に

18 世紀前半とは異なり、18 世紀後半の舞踊の実践について明らかにすることは事実上困難である。というのも、舞踊語法の変化に伴い、この時期にはもはや「舞踊（舞踏）譜」の有用性が信じられなくなっており、ゆえに「舞

踊譜」はほとんど作成されず、舞踊実践の実態を語る記録がほとんど残されていないからである。

よって 18 世紀後半に関する従来の舞踊史研究は、伝記研究、あるいは作品創作論に焦点を当てた舞踊理論研究が中心となってきた。しかし、当時の舞踊理論書を繙いてみると、舞踊を実践する「ダンサーの身体」に関する言説も少なからず含まれていることが分かる。特に、自らダンサー、振付家でもあったジャン＝ジョルジュ・ノヴェールはその主著の中でこの問題について多角的に論じており、こういった彼の言説を分析することは、この時代の舞踊史の十全に論じられていない一面に新たな光を投げかけるものと考えられる。そこで本研究では、ノヴェールの『舞踊とバレエについての手紙』における「ダンサーの身体へ注がれた視線」について考察を行い、さらにこれを歴史的・文化的文脈と照らし合わせながら解釈する作業を行った。以下、この作業から得られた結論と仮説とを記す。

自身ダンサーとして、また振付家として活動しつつ『手紙』の執筆を手がけたノヴェールにとって、ダンサーの身体とは、バレエ作品の「物語を語る媒体」であると同時に、「鑑賞すべき対象」でもあった。そしてこの後者の意識は、①舞踊の３つのジャンル各々の特徴をいかに表現するかという配慮、②ノヴェールの実践家としての経験と舞踊教育の現状に対する危機感、③18 世紀における解剖学の発展、といった要素と深く関わっていることが明らかになった。

「劇としてのバレエ作品」を提唱したノヴェールが、「いかに劇的内容を表現するか」を追求するようダンサーに求めたことは事実である。だがしかし、彼の視線はまた同時に、ダンサーの身体そのもの、そのフォルムにも向かっており、その意味において、ノヴェールと、その後１世紀あまりを隔てて生まれた抽象バレエの美学との間にも響きあう要素を見出すことも可能であると言えるのではなかろうか。

(3)18 世紀末から 19 世紀初頭のバレエについては、当時バレエの一大中心地であったフランス、パリ・オペラ座の状況について調査した。現地に赴いて史料を確認し、特にノヴェールの後を担ったガルデル兄弟および同時代のダンサー、舞踊教師、振付家、劇場運営等に関するデータを収集した。

この時代には身体や技術に対する考え方が大きく転換し、前時代の価値観からの脱却が指向されるようになる。王侯貴族から市民へとバレエの担い手が完全に移行するに伴い、劇場運営のあり方も近代化され、その狭間にあって価値観や美意識の交錯する様は、当時のダンサー、ダンス教師・振付家の記録から如実に知ることができる。18 世紀末からの豊かな試みの数々、大きな変革を経て、バレエは今日あるような舞台芸術としての姿を獲得していくことになったといってよい。

その過程で、始まりにおいて基礎を同じくしていたバレエと社交舞踊とは決定的な分離を見ることになる。バレエやオペラなどの舞台芸術は専門性を高め、そこに舞踏会の場面が特別な意味を帯びて挿入されるようになっていく。実生活において舞踏会を楽しむ文化を持っていた当時の観客にとって、その場面は文字通りリアリティをもって見ることのできる、舞台への共感を鼓舞する重要なシーンとして歓迎されることになったのである。

17 世紀から 19 世紀にかけての約二百年、宮廷文化として始まったバレエは、変革の時代を経て、新たな市民文化としてのバレエへと変容を遂げた。翻って、こうした過程を共有することなくバレエ（あるいは広くダンス）を享受するわが国の状況を考えるとき、歴史を知り、価値観を柔軟に保つことは、むしろ、より重要な意味を持つと言うべきだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

(1)鈴木晶
「ノイマイヤー、魂の振付家」
ダンスマガジン　pp.64-68
査読無、2018 年

(2)森立子
「身体への視線：
　ノヴェールとダンサーの身体」
日本女子体育大学紀要　pp.19-25
査読有、2018 年

(3)鈴木晶
「オペラ座の怪人とパリ」
劇団四季「オペラ座の怪人」公演プログラム
査読無、2017 年

(4)森立子
「17～18 世紀フランスにおける
　　オペラ＝バレエの初演状況」
日本女子体育大学紀要　pp.125-131
査読有　2017 年

(5)森立子
「ノヴェールにおける〈パントミム〉」
日本女子体育大学紀要　pp.67-74
査読有、2016 年

(6)鈴木晶
「フイエ《舞踊記譜法》（1700）をめぐって」
振付のアクチュアリティ Who Dance？
pp.230-241、査読無、2015 年

〔学会発表〕（計 4 件）

(1)市瀬陽子
振付作品：C.モンテヴェルディ
《薄情な女たちのバッロ》
ラ・フォンテヴェルデ第 26 回定期演奏会
2018 年

(2)市瀬陽子
「古典舞踏とオペラ」
早稲田大学オペラ／音楽劇研究所
2017 年

(3)森立子
「身体への視線－
ジャン＝ジョルジュ・ノヴェールの場合」
筑波大学人文社会系シンポジウム
2017 年

(4)市瀬陽子
「古典舞踏からのアプローチ」
JPTA ピアノ教育連盟第 33 回研究大会
2017 年

〔その他〕
アウトリーチ活動関連の情報

市瀬陽子
本課題に取り組む過程において、一般のニーズに応じる形で成果を公表する機会を数多く得た。ルネサンスからバロック時代の舞踊について、バレエやオペラなどの舞台芸術の分野はもとより、音楽団体への情報提供および公開講座、ダンス実技指導（ワークショップ）、講演活動等を実施し、それらを通して、バレエおよびダンスが西欧の文化・芸術において重要な意味を持つことが幅広く理解され、共有された。
さらに振付作品の提供や舞踊公演などの形で研究成果を公表する場を持ち、成果を外部に向けてより広く発信することができた。それにより音楽やオペラ、バレエの分野に関わる人材に対して、歴史を研究する必要性を印象づける結果につながり、さらには文献研究の成果を実践へと結びつけ発展させる可能性を示唆することもできた。分野横断的な活動は、人材育成の見地からも意義深い活動であると考えている。
以下に主なものとして三例を挙げる。

（1）クラシック・バレエ分野への貢献
C.モンテヴェルディの作品《薄情な女たちのバッロ》の復活上演に際し、17 世紀初頭イタリアの舞踊様式を詳述した著作群を参照、現存する振付作品を分析して振付の作業を行い、演奏分野における専門家と協力して、本邦初演となる作品の復活上演に貢献、評価を得た。
振付に際してクラシック・バレエのダンサーに出演を依頼することにより、ダンサーおよびバレエ指導者と研究成果を共有する機会としてこれを活かすことができた。舞踊芸術の一ジャンルとしてクラシック・バレエとは異なる表現を実現し、ダンサーの新しい可能性を引き出すことにも成功した。(2017-2018)

（2）教育現場への貢献
研究当初は想定されなかった分野として、高等学校の教育現場における需要に応じる機会を得た。本研究による成果の一部を成すダンス・ステップの実演が生かされ、実地指導へとつながり、研究成果を一般の教育現場へと拡大することができた。(2016-2018)

（3）他分野への貢献と人材育成
東京藝術大学におけるオペラ定期公演《フィガロの結婚》(W. A. モーツァルト作曲）にて、劇中の舞曲〈ファンダンゴ〉に対する振付と指導を行った。17 世紀から 18 世紀のスペイン舞踊、およびその周辺諸国への影響についての研究を踏まえ、声楽家が踊るためのダンス振付を指導したものである。オペラ作品における劇中ダンス場面の意味と効果、ダンスと舞台上の所作との関係など、文化的な側面を重視して振付作業を行うことにより、人材育成的な意味においても今後につながる活動となった。(2017)

６．研究組織

(1) 研究代表者

市瀬　陽子（ICHISE, Yoko）
聖徳大学・音楽学部・准教授
研究者番号：９０３１６８５２

(2) 研究分担者

鈴木　晶（SUZUKI, Sho）
法政大学・国際文化学部・教授
研究者番号：５０１９６８０４

森　立子（MORI, Tatsuko）
日本女子体育大学・体育学部・准教授
研究者番号：４０７１０８４３